



TITLE:

摘録

AUTHOR(S):

---

CITATION:

摘録. 地球 1927, 8(3): 224-226

ISSUE DATE:

1927-09-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/183320>

RIGHT:

## d. コロンビヤ油田

**位置** 沿革及産額 コロンビヤ共和國には太平洋沿岸、ダリエン灣 Gulf of Darien 沿岸及びマダレナ河 R. Magdalena の低地等に石油の兆候存在せるを以て一九一五年頃より主として米國の資本家の調査並に試掘に従事しつゝあるも未だ充分の成功を見ない。産額の世界の記録に現はれたるは一九二二年にして三二三、〇〇〇呎である。一九二四年の産額は四四五、〇〇〇呎である。産地はマダレナ河の上流にして河口より約三百哩を距るサンタンダー州 Santander のインファンタス Infantas 油田である。油質はボーメ二九度程度のものである。

**地質及鑛床** 産油地層は不整合的關係に於かれたる上部始新及び下部中鮮の兩系統である。鑛床はインファンタス背斜と命名された背斜構造の頂上に形成されてある。貯溜岩は砂層である。目下此の方面の數多の背斜構造が盛に試掘されつゝある故、遠からず相當の産額に達するであらう。

## 摘 録

## ○多田文男、津屋弘通、十勝岳火山を構成する熔岩

(東京帝國大學地震研究所彙報 第二號)

此の火山の爆發現象に關しては餘り多く今迄報ぜられて居るから最早多く言ふ必要を感じない。唯此の爆發はウオルフの火山活動分類に依ればメルカリイによつて初めて唱導された

るゾオルカノ火山の一の活動様式なる(1)ウルトラ、ゾオルカニクの活動に相當するものであつて、パン狀火山彈の少量の拋出に依つて其の活動相の判斷に迷ふ必要はない事と思ふ。此の後半は津屋君の岩石學的研究より成り其處に二個の化學分析が載せられて居る。即ち

(一) 橄欖輝石安山岩 (十勝岳、西々北麓、舊山温泉に近き美瑛川の左岸にある厚さ約七米の熔岩) (主成分鑛物) 斜長石 ( $Ab_{60}An_{40}$ )、單斜輝石、紫蘇輝石及橄欖石

Wt. %	Mol.No.
SiO <sub>2</sub>	865
Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	174
Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	16
FeO	107
MgO	124
CaO	167
Na <sub>2</sub> O	48
K <sub>2</sub> O	13
H <sub>2</sub> O(+)	—
H <sub>2</sub> O(-)	—
P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	1
TiO <sub>2</sub>	13
MnO	7
Total	100.65

C. I. P. W. 式

$$\frac{\text{Sal}}{\text{Fem}} = 1.8$$

$$\frac{Q}{F} = 0.01$$

$$\frac{\text{Na}_2\text{O}' + \text{K}_2\text{O}'}{\text{CaO}} = 0.54$$

$$\frac{\text{K}_2\text{O}'}{\text{Na}_2\text{O}'} = 0.27$$

Osann 式

$$S = 56.67, \quad A = 8.92,$$

$$C = 7.29, \quad F = 20.87,$$

$$n = 7.17, \quad a = 3.66,$$

$$c = 6.81, \quad f = 19.51,$$

$$k = 0.9\%.$$

(二) 最新熔岩火山礫 (今回の爆發最後の抛出物として火口の内外約二八萬平方米の域内に散亂して居る含橄欖輝石安山岩である) (主成分鑛物) 斜長石 ( $Ab_{61}An_{39}$ )、單斜輝石、紫蘇輝石及橄欖石

摘 録

Wt %	Mol.No.
SiO <sub>2</sub>	898
Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	180
Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	19
FeO	86
MgO	102
CaO	157
Na <sub>2</sub> O	39
K <sub>2</sub> O	15
H <sub>2</sub> O(+)	—
H <sub>2</sub> O(-)	—
P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	2
TiO <sub>2</sub>	16
MnO	1
Total	100.16

C. I. P. W. 式

$$\frac{\text{Sal}}{\text{Fem}} = 2.64$$

$$\frac{Q}{F} = 0.13$$

$$\frac{\text{Na}_2\text{O}' + \text{K}_2\text{O}'}{\text{CaO}} = 0.42$$

$$\frac{\text{K}_2\text{O}'}{\text{Na}_2\text{O}'} = 0.38$$

Osann 式

$$S = 59.61, \quad A = 3.52,$$

$$C = 8.21, \quad F = 13.93,$$

$$n = 7.21, \quad a = 3.7,$$

$$c = 8.6, \quad f = 17.7,$$

$$k = 1.1$$

(1) v. Wolf: Der Vulkanismus, Bd. I. 1914, P. 545  
v. Wolf: Der Vulkanismus, Bd. II. 1923, P. 5

(本間)

○ 小金井良精 アイノ民族と其起原并に他民族との

關係 (東洋學藝五百三十號)

一部の論者はアイノはモンゴリアンだといふ、又或者はイン

チアンに類似するといふ。一八九四年にシュレンク氏はアイノは現在の如何なる人種型にも屬しない、しかし彼等は亞細亞大陸に起源したと考へられると説いた。シュレンクはモンゴリアンに壓迫されて大陸から其東縁の島々に移つた、古亞細亞族だと言明した。果して然らばこの大陸から我國への移住通路は朝鮮と對島であつたと考へられる。しかし予は朝鮮半島と滿洲に於て其の昔の足溜を發見し得ない、考古學者の

微細な研究の結果石器時代からのアイノの遺物は朝鮮の何所にも發見されない。該遺物は全く日本列島に局限され、朝鮮の石器時代遺物は全く異つた性質のものである。又北方諸族の間にもアイノと遠い關係をすら想起せしむる者が居ない。南に向へば新石器時代アイノの遺物は琉球列島までは確かに求められる。そこで全く途がたへて臺灣土人は性質が全然變つてくる一方琉球にはアイノの血が日本人よりもより多く混合してゐることが發見される。

渡邊庄三郎教授は印度のトダ族とアイノとの類似を論じ、マールシャル氏の研究に従へば、アイノとマレイ諸族とは無關係であり、太平洋の諸種族中にアイノと共通性を有する手掛りがない。しかしマニラの人類學教授ベーカーはルソン島のイフカオの間にアイノに似た型を發見し、ジョイスは日本貝塚發見の土器とニュギネアの土人の土器に比較して類似を發見した。次にオーストラリア原住民は歐人と一致するやうにアイノもオーストラリアンと關係付けられると思ふ。事實兩人

種間の狭頭、眉間及眉弓の強度の發達と、頭髮の波狀縮毛、窪める眼、體毛、髯の多いことなどが共同性をもつことは否定出來ない。併しもし兩種族間の本質的關係が成立する様に證明されるならば、其分離は驚くべき遼遠な過去に溯るであらう。之を要するにアイノは現在の住地に相應して一人種局を形成するものである。(F.)

### ○小野澄之助原子の變動と地球を構成する物質について (東洋學藏五百三十號)

物質は不滅で、原素は永久不變であるとは十九世紀を通じて信ぜられたが、一八九五、X線の發見から引續きベルケル線の發見があり、原素は自然に變質して他の原素に變る例が明になり、原素不易の結論が破れると共に物質不滅の法則も怪くなつて相對律が出現した、そこで從來地球内部が鐵であるといふ説の如きもやゝ怪くなつてきて地球内部の壓力の分布とか溫度の分布を考へると鐵が原素として存在しうるや否やが疑ふべき事實となる。火成岩の分析の上からも必しも鐵だとは云へぬらしいとて、結論として左の如く述べられる。

一、地球の核部を鐵と論斷する理由は甚だ薄弱である。

一、火成岩を構成する物質は酸素系統と窒素系統の二系統に分たれ兩者の比は略々酸素と窒素の原子量の比即五十三%と四十七%になる。

三、地球を構成する原素の間には、原子變易の跡が認められる。(F.)